論　文　ニダバ (*Nidaba*) 30(2001), 53-64

マリラ語における名詞の声調に関する研究

角　谷　征　昭

0．はじめに

マリラ語(Kimalila,Ishimalila)はバンツー諸語の一つで、タンザニア南西部、ムベヤ県(Mbeya)の山岳地帯で話されている声調言語である。Guthrie(1967)によってM.24に分類されている。話者は約52,000人(1987年)で、調査地であるサンティリア村(Santilya)[1]において、大人は少なくともスワヒリ語（公用語）とのバイリンガルであるが、母語話者同士は専らマリラ語を用い、英語を日常会話で使用できるマリラ語母語話者は殆どいない。子供達は、小学校でスワヒリ語を学ぶまで、マリラ語しか理解できない。彼らは、主に除虫菊とジャガイモの栽培で生計を立てており、宗教はキリスト教である[2]。

1．目的と方法

本稿では、マリラ語の名詞の声調パターンを整理し、更にその中から所有形容詞に修飾された名詞の声調の変化に着目し、その変化の原因について考察したい。

本稿での音声表記[3]について、母音は/i/、/e/、/a/、/o/、/u/の5母音とその長母音 /iː/、/eː/、/aː/、/oː/、/uː/を用いる。子音は、p[p]、b[β][4]、f[f]、v[v]、s[s]、z[z]、t[t]、d[d]、l[l]、ch[tʃ]、j[dʒ]、sh[ʃ]、k[k]、g[g]、kh[x]、gh[ɣ]、h[h]、m[m]、n[n]、ɲ[ɲ]、ŋ[ŋ]、y[j]、w[w]を用いる。マリラ語は、High tone（H）、Low tone（L）、Falling tone（F）、Rising tone（R）の4種類を声調の表現形[5]として持っている。表記はそれぞれ(´)(記号なし)(ˆ)(ˇ)で表わしている。

2．マリラ語の名詞

バンツー諸語の特徴の一つに名詞クラス[6]がある。名詞クラスの類別は名詞だけでなく、その名詞に関わる修飾語句、動詞にも反映される。マリラ語は18の名詞クラスを持っているが、その接頭辞は表1のとおりである。名詞の基本構造は「オーグメント[7]－クラス接辞－語幹」である。第9・10クラスのクラス接辞/N/は後続する音への逆行同化で[m]、[n]、[ŋ]、[ɲ]になる[8]。また、第1クラスと第3クラスのクラス接辞/mu/も、両唇破裂音[b]または歯茎破裂音[t]が後続すると母音[u]が無声化し、[m]、[n]になりやすい。それぞれの名詞クラスの意味的特徴を挙げ

ておく。

・第1クラス、第2クラスは「人間・動物」の名詞が属する[9]。

・第6クラスは、水、汗、油などの「液体」の名詞が属する。液体を表す名詞には基本的に単複の概念がないが、少量の液体を表現するために単数の第5クラスを用いることがある。

・第7・8クラスの組み合わせは「大きい物」「悪い事物」も表わす。

・第12・13クラスの組み合わせは「小さい物」「良い事物」も表わす。

・第14クラスは、美味さ、高さ、広さ、結婚、盲目などの「抽象概念」も表わす。

・第15クラスは動詞の不定形のクラスであり、現在のところ第15クラスに入る動詞の不定形以外の語は見つかっていない。

・第16、17、18クラスは場所に関わる名詞のクラスである。これらは、名詞としてよりは、むしろ副詞的に使われることが多い。第16クラスは具体的な場所、第17クラスは不定の場所、第18クラスは「中」のような閉じた空間や面積を表わすという、大まかな使い分けがある。

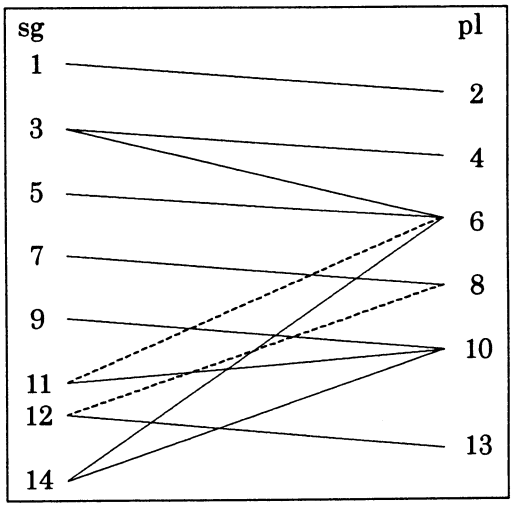
表 1　名詞クラス一覧

クラス	属性	ｵｰｸﾞﾒﾝﾄ	クラス接辞	マリラ語	日本語
1cl.	単数	u	mu	u-mû-ntu	人
1acl.[10]	単数	u	-	u-bâ:ba	父
2cl.	複数	a	ba	a-bâ-ntu	人
3cl.	単数	u	mu	u-mu-shâle	矢
4cl.	複数	i	mi	i-mi-shâle	矢
5cl.	単数	i	- / li	î-twe	頭
6cl.	複数	a	ma	á-ma-twe	頭
7cl.	単数	i	shi	i-shi-pûŋgo	肩
8cl.	複数	i	vi	i-vi-pûŋgo	肩
9cl.	単数	i	N/ -	í-n-tumba	タバコ
10cl.	複数	i	N/ -	í-n-tumba	タバコ
11cl.	単数	u	lu	ú-lu-sisi	髪
12cl.	単数	a	ha	á-ha-sepe	体毛
13cl.	複数	u	tu	ú-tu-sepe	体毛
14cl.	単数	u	wu	u-wu-tândo	膜
15cl.	動詞	(u)[11]	ku	kú-lola	見ること
16cl.	場所	(a)	pa	pá-pe:lu	居間
17cl.	場所	(u)	ku	kú-mi:so	顔
18cl.	場所	(u)	mu	mú-ka:si	中

名詞クラスは名詞の「数」とも関わっており、第1クラスから第14クラスまでは各クラスが単数か複数の属性を持つ。第1クラスの複数は第2クラスであるというように、数で対応するクラスのペアが大体決まっており、「数」の対応は表2に示されている。破線は該当する語が1語あることを示す。「数」の対応の特徴は以下のとおりである。

・第1クラスと第2クラスの対応は安定している。
・第3クラスに属する名詞のうち、マリラ語起源の語の複数は第6クラスのようである。スワヒリ語からの借用語は第4クラスを複数に持つ[12]が、第6クラスを複数にすることも許容される傾向がある。
・第11クラスの複数は殆どが第10クラスだが、第6クラスの語が1語[13]ある。
・第12クラスの複数は第13クラスが基本だが、第8クラスの語が1語[14]ある。
・第14クラスの語は複数に第6クラスか第10クラスを持つが、特に偏りは見られない。

表 2　名詞クラスの単複の対応



3．オーグメント付きの名詞の単独形

オーグメントは、一つの母音からなり、名詞の使われる意味的環境によって名詞に付けられる接頭辞である。名詞にオーグメントが付くときと付かないときでは名詞の声調に変化が見られるので、別々に見ていくことにする。表3はオーグメント付き単独形の声調パターンを示したものである。

(1)語中にH、F、Rを持たないもの、
(2)語中に唯一のH、F、Rが語末から2音節目にあるもの、
(3)語中に唯一のH、F、Rが語末から3音節目にあるもの、
(4)語中に唯一のH、F、Rが語末から4音節目にあるもの、
(5)語中に唯一のH、F、Rが語末から5音節目にあるもの、
(6)語中に唯一のH、F、Rが語末から6音節目にあるもの、

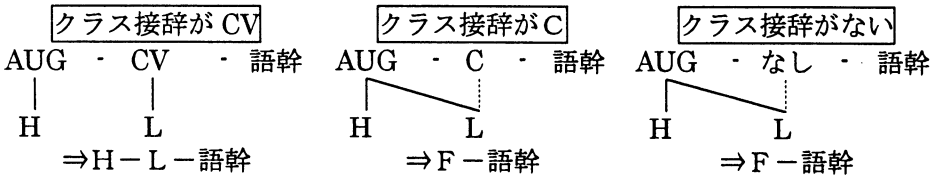
の順になっている。列は語の音節数順に配列してある。(7)はH、F、Rを語中に2つ以上持つ語である[15]。オーグメント付き単独形の特徴として次の2点がある。

・少なくともオーグメントと語幹が必要なので、必ず2音節以上になる。
・語末は決してH、F、Rにならない。(常にL)

これらの２点の理由で該当声調を示す語がありえない個所は▒で示し、それ以外の空白は該当する例が入手できなかったことを示している。

表３において、ＦまたはＲが語頭の音節に（つまり、オーグメント上に）現われる可能性のある語は、クラス接辞が子音だけか、クラス接辞の現れないものである。クラス接辞が子音だけのとき、クラス接辞に関係する声調（ＨまたはＬ）がオーグメントと関係し、その結果、２音節で実現されるべき２つの声調が１音節で実現されるため、ＨＬがＦに、ＬＨがＲになる。このことは、AUG（オーグメント）、Ｃ（子音）、Ｖ（母音）を用いて次のように表せる。

ＨＬのモデル



ＬＨのモデル

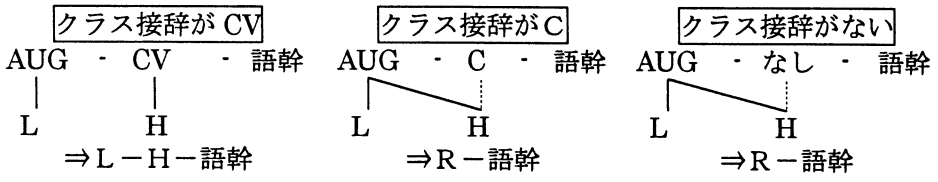


表 3　オーグメント付き単独形の声調パターン

	声調パターン	1音節語	2音節語	3音節語	4音節語	5音節語	6音節語
(1)	_(Lのみ)			LLL impa:swa	LLLL ahapa:swa	LLLLL izuluzu:ta	LLLLLL amazuluzu:ta
(2)	_HL			LHL uwúla	LLHL ikanísa	LLLHL isefulíla	LLLLHL amasefulíla
	_FL		FL îtwe	LFL ilônda	LLFL idondôki	LLLFL amatokêo	LLLLFL amachenjichênji
	_RL		RL ĭnswi	LRL ihănda	LLRL ulutŭzyo	LLLRL amakuŋgŭlu	
(3)	_HLL			HLL íbanda	LHLL ulúlevu	LLHLL ikosómolo	LLLHLL amakosómolo
	_FLL			FLL ûmbili	LFLL uchâkolwa	LLFLL abachâkolwa	
	_RLL			RLL ĭpapa	LRLL imbăŋgili	LLRLL ulusăndiho	LLLRLL ishitagălilo
(4)	_HLLL				HLLL áhasepe	LHLLL abáhambaku	
	_FLLL				FLLL înzogolo		
	_RLLL						
(5)	_HLLLL					HLLLL úkakatula	LHLLLL abákakatula
	_FLLLL						
	_RLLLL						

(6)	_HLLLLL						HLLLLL ámagalagamba
	_FLLLLL						
	_RLLLLL						
(7)	_HHL			HHL íhómbwa	LHHL abáwípwa		
	_HLHL			HLHL ámagúle	LHLHL ulúdubúha		
	_RLHL				RLHL ĭndubúha		
	_HRL			HRL úsĕnje	LHRL inkófwĕla		
	_HHRL				HHRL ábánzŏ:ka		

4．オーグメントなしの名詞の単独形

オーグメント付き名詞の語末がHになることはないが、オーグメントなしの名詞の語末はHになることがある。語末がHになる語には次の３種類がある[16]。

1)Hを一つだけ持ち、かつそのHがオーグメント上にある語。これらの語は殆どの名詞クラスに存在し、オーグメントがないときHが語末音節で実現される。

「体毛」	12cl.	á-ha-sepe	→	ha-sepé
「鱗」	6cl.	á-ma-galagamba	→	ma-galagambá

2)クラス接辞が子音だけの語。第１クラス、第３クラス、第９クラス、第10クラスに存在する。表４の(5)の/N/[17]は、オーグメントがないとき常にLである。そのため、オーグメントがH、F、Rの語において、語中に他のH、F、Rがないならば語末音節でHが実現される[18]。

・オーグメントなしで語末がHになる例

	単数				複数			
「髪」	11cl.	ú-lu-sisi	→	lu-sisí	10cl.	î-n-sisi	→	n-sisí
「ヒゲ」		u-lú-levu	→	lú-levu		ĭ-n-devu	→	n-devú
「蜂の針」		ú-lu-bo:lela	→	lu-bo:lelá		í-m-bo:lela	→	m-bo:lelá
「体」	3cl.	û-m-bili	→	m-bilí	6cl.	á-ma-bili	→	ma-bilí
「オール」		ú-n-ti:ho	→	n-ti:hó		á-ma-ti:ho	→	ma-ti:hó
「境」	3cl.	ŭ-m-paha	→	m-pahá	4cl.	i-mí-paha	→	mí-paha

3)第５クラスの名詞でオーグメントにHがあるもの。これらは1)に含めることも出来るが、クラス接辞が現れない点が1)と異なる。第５クラスのクラス接辞-li-が現れるのは、語幹が母音で始まっているか、オーグメントなしの時である。オーグメントがFのときは「オーグメント（H）－クラス接辞（L）」であると解釈でき、オーグメントがRのときは「オーグメント（L）－クラス接辞（H）」であると解釈できる。また、オーグメントがHのときは「オーグメント（H）－クラス接辞（L）」と解釈できる[19]。これらは第５クラスの複数形である第６クラスを見ると

分かり良い。

	単数				複数			
「頭」	5cl.	î-twe	→	li-twé	6cl.	á-ma-twe	→	ma-twé
「耳」		í-kutwi	→	lí-kutwi		a-má-kutwi	→	má-kutwi
「袋」		í-fu:ku	→	li-fu:kú		á-ma-fu:ku	→	ma-fu:kú
「目」		í-li-iso	→	li-isó		á-mi-iso	→	mi-isó
						(*á-ma-iso)[20]		(*ma-isó)

表４はオーグメントなしの単独形の声調パターンを示したものである[21]。

(1a)語中にH、F、Rを持たないもの、

(2a)語中に唯一のH、F、Rが語末音節にあるもの、

(3a)語中に唯一のH、F、Rが語末から２音節目にあるもの、

(4a)語中に唯一のH、F、Rが語末から３音節目にあるもの、

(1b)クラス接辞が鼻母音であり、語中にH、F、Rを持たないもの、

(2b)クラス接辞が鼻母音であり、語中に唯一のH、F、Rが語末音節にあるもの、

(3b)クラス接辞が鼻母音であり、語中に唯一のH、F、Rが語末から２音節目にあるもの、

(4b)クラス接辞が鼻母音であり、語中に唯一のH、F、Rが語末から３音節目にあるもの、

の順になっている。(5b)はH、F、Rを２つ以上持つものである。列は語の音節数順に配列してある。語頭の/N/は異なった振る舞いを見せるので、語頭が/N/のものとそれ以外のものとを分けて表にした。/N/も１音節として数えている。

表 4　オーグメントなしの単独形の声調パターン

	声調パターン	1音節語	2音節語	3音節語	4音節語	5音節語
(1a)	_(L のみ)			LLL hapa:swa		
(2a)	_H		LH litwé	LLH libandá	LLLH tuzuguní	LLLLH magalagambá
(3a)	_HL		HL wúla	LHL kanísa	LLHL mabilíka	LLLHL lisefulíla
	_FL		FL mûntu	LFL mishâle	LLFL lusindâni	LLLFL likalatâsi
	_RL		RL hŏmbwa	LRL holŏŋgwa	LLRL likuŋgŭlu	
(4a)	_HLL			HLL lúlevu	LHLL lifúgamo	LLHLL bapalámani
	_FLL					
	_RLL			RLL lĭnsozi	LRLL lusăndiho	LLRLL shitagălilo
(1b)	N_(L のみ)			NLL mpa:swa		
(2b)	N_H		NH mbwá	NLH mpuló	NLLH mbulunjé	
(3b)	N_HL			NHL nsúŋkwi	NLHL ndubúha	

	N_FL			NFL mbâo	NLFL nsahâni	
	N_RL			NRL mpŭnga		
(4b)	N_HLL				NHLL njónjomi	NLHLL mpalámani
	N_FLL					
	N_RLL				mbăngili	
(5b)	N_HHL				NHHL nsyálá:li	
	N_HRL				NHRL ŋkófwĕla	

（ は該当語彙がありえないことを示す。）

5．所有形容詞[22]に修飾された名詞

表５は、各クラスの名詞を所有形容詞で修飾させたものである。ここには１人称単数と複数の２種類しか挙げていないが、２人称単数 wâ:ho (1cl.)は１人称単数と同じ変化を見せ、２人称複数 wi:ɲu(1cl.)と３人称単数 wa:kwe (1cl.)、複数 wa:bo (1cl.)の３種は１人称複数と同じ変化を見せる。

表 5　所有形容詞

名詞ｸﾗｽ	単独形		1.sg「私の～」		1.pl「私達の～」	
1cl.	úmwana	「子供」	úmwana	wâ:ni	úmwaná	wi:tu
2cl.	ába:na	「子供」	ábana	bâ:ni	ábaná	bi:tu
3cl.	umushâle	「矢」	umushále	wâ:ni	umushálé	wi:tu
4cl.	imishâle	「矢」	imishále	yâ:ni	imishálé	yi:tu
5cl.	íli:so	「目」	íli:so	lyâ:ni	íli:só	lyi:tu
6cl.	ámi:so	「目」	ámiso	gâ:ni	ámisó	gi:tu
7cl.	ishínama	「足」	ishínama	shâ:ni	ishínamá	shi:tu
8cl.	ivínama	「足」	ivínama	vyâ:ni	ivínamá	vi:tu
9cl.	íɲumba	「家」	íɲumba	yâ:ni	íɲumbá	yi:tu
10cl.	íɲumba	「家」	íɲumba	zyâ:ni	íɲumbá	zyi:tu
11cl.	úlusisi	「髪」	úlusisi	lwâ:ni	úlusisí	lwi:tu
12cl.	áhasepe	「体毛」	áhasepe	hâ:ni	áhasepé	hi:tu
13cl.	útusepe	「体毛」	útusepe	twâ:ni	útusepé	twi:tu
14cl.	uwâvu	「網」	uwávu	wâ:ni	uwávú	wi:tu
15cl.	kúlola	「見る」	kúlola	kwâ:ni	kúlolá	kwi:tu
16cl.	pámi:so	「顔」	pámiso	pâ:ni	pámisó	pi:tu
17cl.	kúmi:so	「顔」	kúmiso	kwâ:ni	kúmisó	kwi:tu
18cl.	múmi:so	「顔」	múmiso	mwâ:ni	múmisó	mwi:tu

表５から、１人称単数の所有形容詞の付く時と１人称複数の所有形容詞が付く時とで次のような特徴が見られる。

１人称単数の特徴として、

a) 次末音節のＦをＨにすることがある。

b) 次末音節の長音を短音にすることがある。

１人称複数の特徴として、

c) 次末音節のＦをＨにする。

d) 次末音節の長音を短音にすることがある。

e) 名詞の語末をＨにする。

１人称複数で語末がＨになった理由を考察するために、所有形容詞が名詞を修飾せず所有代名詞となるときに、１人称単数・複数ともＨを持つことが手がかりになるだろう。

１人称単数：	1) uwá:ni akúlola.	「私の(1cl.)が見ている。」（主語）
	2) uwá:ni yu yu:nú	「私の(1cl.)はこちらです。」（主語）
	3) û:nu wâ:ni	「こちらは私の(1cl.)です。」（補語）
１人称複数：	1a) uwí:tu akúlola	「私達の(1cl.)が見ている。」（主語）
	2a) uwí:tu yu yu:nú	「私達の(1cl.)はこちらです。」（主語）
	3a) û:nu wi:tú	「こちらは私達の(1cl.)です。」（補語）

これらを比べると大きな違いは 3)と 3a)にある。3)、3a)の例は主語と補語の関係で、補語になった所有代名詞は独立形で現われている。表５の例は修飾語と被修飾語という主従関係で、１人称複数は独立形ではなく語幹の１音節前（つまり名詞の語末）でＨを実現している。3a)の語末がＨになった原因を名詞の変化に従って[23]考えると、Ｈを持つオーグメントが消えたからと見ることができる。だが、1a)、2a)を見るとＨがオーグメントにない。この点について、今後更なる分析を要する。

６．動詞の主語になる「名詞－所有形容詞」

「名詞－所有形容詞」が主語になるとき、１人称単数では名詞中のＦがＨになりやすいようである。１人称複数では名詞中のＨが語末まで広がることがある。

１人称単数形の所有形容詞

4) úmwana wâ:ni agwíye 「私の子供(1cl.)が倒れた。」

5) ábana bâ:ni bagwíye 「私の子供達(2cl.)が倒れた。」

6) umushále wâ:ni ugwíye 「私の矢(3cl.)が落ちた。」

7) úlusisi lwâ:ni lugwíye 「私の髪(11cl.)が落ちた。」

8) însisi zyâ:ni zigwíye 「私の髪(10cl.)が落ちた。」

9) áhasepe hâ:ni hagwíye 「私の体毛(12cl.)が落ちた。」

10) uwávu wâ:ni wugwíye 「私の網(14cl.)が落ちた。」

11) kuhómana kwâ:ni kwândile ílímandi. 「私の戦い(15cl.)は昔始まった。」

１人称複数の所有形容詞

4a) úmwáná wi:tu agwíye 「私達の子供(1cl.)が倒れた。」

5a) ábáná bí:tu bagwíye 「私達の子供ら(2cl.)が倒れた。」

6a) umushálé wi:tu ugwíye 「私達の矢(3cl.)が落ちた。」

7a) úlusisí lwi:tu lugwíye 「私達の髪(11cl.)が落ちた。」

8a) ínsísí zyi:tu zigwíye 「私達の髪(10cl.)が落ちた。」

9a) áhasepé hi:tu hagwíye 「私達の体毛(12cl.)が落ちた。」

10a) uwávú wi:tu wugwíye 「私達の網(14cl.)が落ちた。」

11a) kuhómáná kwi:tu kwândile háli. 「私達の争い(15cl.)は昔始まった。」

4)-11a)までの名詞の声調を整理すると表6のようになる。

表 6 主語になった「名詞ー所有形容詞」の声調

単独形		1人称単数			1人称複数		
úmwana	HLL	4)	úmwana	HLL	4a)	úmwáná	HHH
ába:na	HLL	5)	ábana	HLL	5a)	ábáná	HHH
umushâle	LLFL	6)	umushále	LLHL	6a)	umushálé	LLHH
úlusisi	HLLL	7)	úlusisi	HLLL	7a)	úlusisí	HLLH
însisi	FLL	8)	însisi	FLL	8a)	ínsísí	HHH
áhasepe	HLLL	9)	áhasepe	HLLL	9a)	áhasepé	HLLH
uwâvu	LFL	10)	uwávu	LHL	10a)	uwávú	LHH
kuhómana	LHLL	11)	kuhómana	LHLL	11a)	kuhómáná	LHHH

1人称単数を見ると、6)umushále、10)uwávu はFがHになるが、8)însisi はFが変化していない。このことから、次末音節までに変化を起こす力を持っていると言えよう。1人称複数を見ると、6a)umushálé、8a)ínsísí、10a)uwávú ともにFがHになり、更に、8a)ínsísí ではLだった次末音節もHになっている。4a)úmwáná、11a)kuhómáná を見ても、次末音節はHになっている。しかし、7a)úlusisí と 9a)áhasepé は語末がHになっただけである。これらのことから後ろから3音節までに変化を起こす力を持っていると言える。

後ろから4音節目にHのある 7a)と 9a)の例を見ると、語末がHになるだけの変化に終わっていることから、1人称複数の所有形容詞の影響は、名詞の後ろから3音節目までだということが分かる。また、6a)と 10a)を見ると、この影響は名詞中のFを越えて、それより左方に及んでいない。この影響には次の2つの性質があるようである。

・名詞の語末から3音節以内にHかFがあると High Tone Spreading を起こす。

・High Tone Spreading は語中の最後のH又はFを越えて左方には影響しない。

7. まとめ

ここまで、名詞の声調のパターンを整理し、所有形容詞が付いた時の声調の変化について述べてきた。その結果は、次の2点にまとめることができる。

まず独立形について、マリラ語の名詞の声調を 1) オーグメント付きの場合、2) オーグメントなしの場合、について整理した。1) と 2) の関係は 1) においてオーグメントにHがあるか

どうかで大きく分かれる。オーグメントにHがある語は 2) においてHが語末で実現される。オーグメントがLの語、又は2つ以上のH、F、Rを持つ語の声調は変化しない。

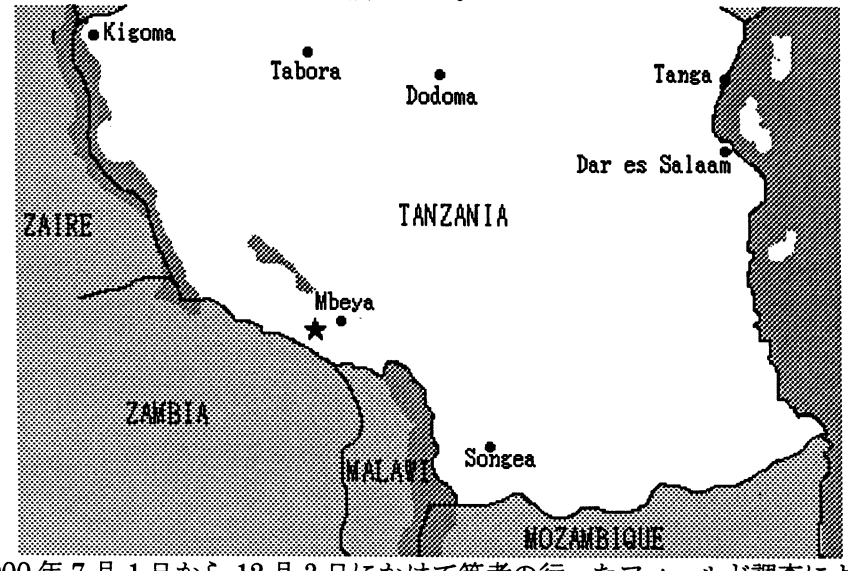
次に、名詞に所有形容詞が付いたときの声調の変化について考察した。所有形容詞は修飾する名詞の語末がHになるかならないかで2種に分かれる。名詞の語末をHにするものは1人称複数、2人称複数、3人称単数・複数、名詞の語末をHにしないものは1人称単数、2人称単数である。前者は修飾される名詞の語末をHにし、さらに主語になるとき、名詞の語末3音節以内に High tone Spreading を起こさせる。

今後の課題として、第1に、FとRの解釈の仕方がある。マリラ語の声調の表現形はH、L、F、Rの4種類であるが、これらはHとLの2種に集約できると思われる。そうすると、全てのF、RはH、Lの融合か一つの声調素Hの表現形として解釈できることになる。本研究では語頭に限った分析しかしていないが、今後語中も含め全てのFとRについても考察していきたい。第2に、声調をモーラを単位にして分析することである。長母音が声調の変化によって短母音になるといったことから、長母音、子音群と声調の変化との間に関係があることが予想される。

付記:本稿は平成12年度笹川科学研究助成から補助を受け行われた研究の成果の一部である。また、アジア・アフリカ言語文化研究所教授、梶茂樹先生には、研究調査の全般にわたり御指導を頂きました。ここで深謝致します。

注

1 調査地のサンティリア村は凡そ★の場所である。



本稿は、2000年7月1日から12月3日にかけて筆者の行ったフィールド調査により得られたデータに基づいている。マリラ語(Kimalila)の話される地域を自称他称共にウマリラ(Umalila)

と呼び、サンティリア村はウマリラの行政、商業の中心地である。
2 調査に協力してもらったインフォーマントは40代の男性で生まれも育ちもサンティリア村、最終学歴はサンティリア小学校である。彼も英語を殆ど理解できない。周辺言語についても理解できるが恐らく十分には話せない。敬虔なクリスチャンである。
3 音声表記は今回のフィールド調査で行った音素設定に基づいている。
4 /b/は鼻音の後で両唇破裂音[b]になる。
5 表現形は4種類があるが、基底ではHとLの2種類と考えられる。つまり、HLの連続から出来たF、LHの連続から出来たR、何らかの要因でHが音節内の後半まで高さを保てずに出来たF、連続するLの中で一定の低さが維持を出来ずに出来たRなどが考えられる。
6 名詞クラスは基本的に接頭辞が語幹に付くことで表わされる。名詞クラスは単数と複数が別のクラスとして類別される。また、同じ語幹でも別の接頭辞を付けることで別の名詞クラスになるため、名詞語幹と名詞クラスに絶対的な対応関係があるわけではない。
cf. i-shí-levu(7cl.)「顎 sg.」 i-ví-levu(8cl.)「顎 pl.」
u-lú-levu(11cl.)「ヒゲ sg.」ĭ-n-devu(10cl.)「ヒゲ pl.」
7 オーグメント（添接辞、augment）は前接頭辞（pre-prefix）とも言う。これは、クラス接辞の前、又は、形容詞や所有辞等の呼応の接頭辞の前に付く文法的形態素である。
8 第9・10クラスでは、語幹が/h/で始まる時クラス接辞が現れにくいようだ。また、スワヒリ語からの借用語で、スワヒリ語においてクラス接辞が付いていないものもクラス接辞を付けない。他に、語幹が/m/で始まる語では、次のような現象も見られる。*i-m-mili > îmili
9 唯一の例外は「零（ゼロ）」を意味する usifûli(1cl.)、abasifûli(2cl.)である。
10 第1クラスは、正確には表1のように「第1クラス」と「第1aクラス」に分かれる。「第1クラス」はクラス接辞が付くが、「第1aクラス」はクラス接辞が付かない。第2クラスも「第2クラス」と「第2aクラス」に分かれるかもしれないが、現時点では第2クラスには第1クラスのようなはっきりとした区別を見出していない。このクラスの区分は本稿に支障を与えないので、「第1クラス」と「第1aクラス」を区別せず、第1クラスとしてまとめて扱っている。
11 第15クラスから第18クラスまでは、通常、名詞にオーグメントが付かない。
12 スワヒリ語では、第3クラスの名詞の複数は第4クラスである。
13 u-lu-sûːto(11cl.)「土、埃 sg.」、a-ma-sûːto(6cl.)「土、埃 pl.」
14 a-hâ-ntu(12cl.)「物 sg.」、i-vî-ntu(8cl.)「物 pl.」
15 (7)のような2つ以上の要素を持つ場合については、どうして2つのH、F、Rを持っているのかを今後考察する必要があるだろう。
16 語末がHになる理由は今のところ分からない。この問題点の解明は今後の課題である。
17 このクラス接辞/N/は、音節主音的鼻音(syllabic nasal)であり、一つの音節を担うことができるとされている。
18 この/N/について、語中に唯一のH、F、Rが「オーグメントークラス接辞」上にある時だけ、声調に影響を与えているので、語中にH、F、Rが2つ以上あるときと、「オーグメントークラス接辞」がLの時には/N/を考慮していない。しかし、今後、これら全ての/N/を扱うべきかどうかを検討しなければいけない。また、今回は長母音を無視したが、長母音が声調に与える影響も十分に検討して、モーラを基準にした考察が必要である。
19 第5名詞クラスにおいて、名詞語幹に長母音か[mb]、[nd]などの子音群があると、オーグメントがHになる傾向がある。
20 クラス接辞が母音/a/を持つ第2クラス、第6クラス、第12クラス（恐らく第16クラスも）では、後続の名詞語幹が母音から始まるときに逆行同化が起こる。
*á-ma-enda > ámeːnda「服」, *a-má-oyo > amôːyo「心臓」, *a-má-uba > amûːba「砂糖きび」
21 表4に挙げているオーグメントなしの語形は殆どが「これ（ら）は～である。」という環境で記述したものである。例えば、úmwana「子供(1cl.)」について、"ûːnu mwaná"「これは子供です。(ûːnu は第1クラスの近称の指示詞)」という具合である。この環境で調べると、第1クラスと第2クラスには独特な現れ方をする語がある。いくつかの例を挙げておくが、これら

の語の構成が１語なのか２語（例えばコピュラと名詞）からなるのかまだ良く分からない。特に第 1a・２クラスの組み合わせに多い。このような語は表４からは外してある。

umwalímu「先生(1cl.)」	ûːnu yumwalímu「彼は先生です。」
abamwalímu「先生(2cl.)」	îːba babamwalímu「彼らは先生です。」
	îːba baːmwalímu
úhambaku「兄弟(1cl.)」	ûːnu yúhambaku「彼は兄弟です。」
abáhambaku「兄弟(2cl.)」	îːba bábáhambaku「彼らは兄弟です。」
	îːba báːhambaku

22「所有形容詞」を分析すると２形態素に分かれる。本来の形容詞は名詞と同じクラス接辞が付くのだが、「所有形容詞」はクラス接辞が付かずに連係辞（「～の」を意味する語で、掛かっていく語のクラスに一致して変わる。）と融合している。連係辞と融合したこれらの語彙にはオーグメントを付けることができる。下の表は第１クラスと第 10 クラスの「所有形容詞」を２形態素に分析している。（声調記号は省略）

人称・数	第１クラス		第 10 クラス	
１人称・単数	*wa + ani	> waːni	*zya + ani	> zyaːni
２人称・単数	*wa + aho	> waːho	*zya + aho	> zyaːho
３人称・単数	*wa + akwe	> waːkwe	*zya + akwe	> zyaːkwe
１人称・複数	*wa + itu	> wiːtu	*zya + itu	> zyiːtu
２人称・複数	*wa + iɲu	> wiːɲu	*zya + iɲu	> zyiːɲu
３人称・複数	*wa + abo	> waːbo	*zya + abo	> zyaːbo

23 名詞と形容詞の区別は形態的に容易ではない。声調の変化も同じだと思われる。マリラ語の場合、形容詞には２種類見られるが、いずれにせよオーグメントとクラス接辞（又はクラスを標示する要素）と語幹から成っていて、名詞になることができる。形容詞の名詞との違いは、形容詞が単独で他の語を修飾でき、修飾する名詞のクラスに一致することである。

参考文献

Clements,G.N. and Goldsmith,J.(1984) Autosegmental Studies in Bantu Tone:Introduction. *Autosegmental Studies in Bantu Tone 3*, 1-18. Foris Publications, Dordrecht.

David Crystal (2000) *Language Death,* Cambridge U.P.

Guthrie,M. (1967) *The Classification of the Bantu Languages.* International African Institute, London.

Labroussi,C. (1999) Vowel Systems and Spirantization in Southwest Tanzania. Bantu Historical Linguistics. 335-377.CSLI Publications

Polomé,E.C. and Hill,C.P. (1980) *Language in Tanzania.* Oxford.U.P.

Voorhoeve,J. (1973) Safwa as a Restricted Tone System. *Studies in African Linguistics, Vol.4*, 1-21.

Yukawa Yasutoshi (1992) Tonological Study of Nyiha Verbs, *Studies in Tanzanian Languages.* ILCAA

清水　紀佳（1988）「アフリカの諸言語」『言語学大辞典　第１巻』,237-439,三省堂